# 琉球藍関係資料からの一考察

大湾ゆかり1)

A study from the manuscripts about Ryukyu Indigo makers.

## Yukari OWAN 1)

#### **Abstract**

In this article, I will introduce materials related to Ryukyu indigo from the materials collected at the exhibition, and consider the names of dyes such as Ryukyu indigo and the plants that are the raw materials, focusing on historical materials from the Meiji era. This is because, according to the survey conducted for the exhibition, some modern Okinawan indigo craftsmen have a strong commitment to the names of plants and dyes.

#### はじめに

沖縄の伝統的な染織物において、青系の色は主に リュウキュウアイと、ナンバンコマツナギやタイワ ンコマツナギという植物から作る沈殿藍が使われて いる。リュウキュウアイとはキツネノマゴ科の多年 草植物で、これを原料にした染料を「琉球藍」「泥藍」 「藍玉」等と称している。琉球藍は、沖縄島では琉球絣、首里織、紅型、花織、芭蕉布等、久米島では 久米島紬、宮古島では宮古上布等に利用されている。 一方、ナンバンコマツナギやタイワンコマツナギは マメ科の低木の多年草植物で、八重山地方で多く使 われている。これらの植物は「インドアイ」や「キ アイ」と呼ぶことあり、小浜島ではそれらから作る 藍染料で麻糸を黒に近いほど濃く染めて紺地の着尺 を織っている。

当館では、令和2年度の企画展として「沖縄の藍一自然と人が織りなす製藍の技一」を開催し、その中で世界の製藍技法や染織物とともに沖縄の製藍技法や現在の状況、琉球王国時代から受け継がれた染織品の数々を展示した。そして、琉球藍が沖縄の染織文化の上で欠かすことのできない染料であり、その製藍技術が今日まで受け継がれてきていることを紹介した。

本稿では、展覧会を通じて収集した資料の中から 琉球藍の製藍に関する資料を抜き出し紹介するとと もに、筆者が展覧会に向けて行った調査の中でいろ んな方から投げかけられ、疑問に思った「琉球藍」 等の染料とその原料となる植物の名称について、主 に明治時代の史料を参考にして考察してみたい。

これまでに筆者は、統計資料や新聞、さらに藍壺の遺構等の踏査や聞き取り調査等から、明治から昭和初期の琉球藍の製藍業を取りまく社会背景について論考をまとめたことはある[1993, 1998]が、そこでは名称について取り上げることはなかった。しかし、この数年来の調査の中で、沖縄の藍の製造者の中には、植物や染料の呼び方について様々なご意見があることがわかった。そこで本稿では、「琉球藍」等の沖縄の含藍植物と藍染料の名称について、それらの名称が定着した明治時代の史料をもとに整理することにする。

その前にまずは琉球藍に関する文献・資料を紹介しよう。

## 1. 琉球藍関係資料について

藍染料に関する文献・資料は、実に多数出版され、 また、インターネット上でもたくさんの情報が掲載

<sup>1)</sup> 沖縄県立博物館・美術館 〒 900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1 Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan

されている。しかし、その中から琉球藍の製藍に限ると、日本本土で利用されているタデアイ (蓼藍) やそれから作る蒅染料の情報よりはるかに少ない。

琉球藍の製藍者や製藍技法について記述した書籍では、小橋川順市氏が2004年に著した『沖縄 島々の藍と染色』が、沖縄の藍染料に特化した唯一の本である。このほか、田中俊雄・田中玲子著の『沖縄織物の研究』[田中1952]、兼次佐一著『伊豆味誌』[兼次1965]、富山弘基・大野力著『沖縄の伝統染織』[富山1971]、竹内淳子『藍 I 』『藍 II』[竹内1991.1999]、『本部町史』[本部町史編集委員会1994]、松本由香・佐野敏行著『沖縄の染め織りと人びとの暮らし』[松本・佐野2020]等に、琉球藍に関する章立てがあり、主に本部町伊豆味近辺の内容が記載されている。

これに対して、雑誌や学会誌等の刊行物には、琉球藍に関する記事や論文を見つけることができる。現在までに筆者が収集した資料の一覧は、表1及び表2のとおりである。

今回の展覧会において重要な資料として参考にし たのが、盛谷理絵氏の大阪芸術大学博士課程論文「沖 縄本島におけるリュウキュウアイの泥藍づくりに関 する研究」「盛谷2014]である。盛谷氏は2010年か ら2014年にかけて修士論文「盛谷2011」と博士論文 [前掲]を発表した。その論文には、筆者が1994年 に提出した修士論文「リュウキュウアイ(琉球藍) の民族技術論的研究-沖縄県本部町における製藍技 術を事例として」より、さらに一歩踏み込んだ研究 成果が記されており、2000年代に入ってからの琉 球藍の製藍業を知る上で貴重な資料となっている。 また、当該論文では世界や日本の藍染料に関する文 献資料を整理して藍染料の歴史について記述してお り、当館の年表作成に大いに役立った。盛谷氏の本 論部分では、沖縄の沈殿藍づくりと中国浙江省のそ れとの比較研究等を行い、中国からの製藍技法の伝 来を示唆する内容となっている。

このほか、本展覧会に際して明治から昭和初期の 史料も複数入手した。これらは、国立国会図書館サー

表1.雑誌に掲載された琉球藍関係の記事一覧

	著者・編集者	発行年	記事タイトル	掲載雑誌名	発行者
1	後藤捷一	1974	沖縄産 植物染料に就いて 季刊染織と生活 No.4		染織と生活社
2	吉岡幸雄	1980	伊豆味の琉球藍	染織の美 18	京都書院
3	小橋川順市	1986	ドイオ前線実用化へまっ してら 琉球藍製造技術 の確立  月刊おきなわ 緑と生活 1986 3 月号 新華		新報出版
4	不詳	1986	琉球泥藍の古法を復活= 本部町山里の比嘉翁 (90) 父子=	月刊おきなわ 緑と生活 1986 3 月号	新報出版
5	東江幸信	1986	琉球藍による新発見 革命 的藍染め技術の探求	月刊染織 α No.66 1986 9 月号	染織と生活社
6	邑田裕子	1994	リュウキュウアイ	週刊朝日百科 016 植物の世界	朝日新聞社
7	小橋川順市	2004	琉球藍/印度藍/蓼藍の 栽培と製藍 南島の琉球列 島の藍草	月刊染織 α No.276	染織と生活社
8	又吉栄喜	2007	藍一路 伊野波盛正と琉 球藍	季刊銀河 2007 冬 第 152 号	文化出版局
9	吉岡幸雄・與那 嶺一子	2017	特集 島々の藍-琉球に 伝わる染織-	季刊 approach 第 218 号	竹中工務店広報部

表2. 琉球藍の製造に関する論文や報告書一覧

	著者・編集者	発行年	記事タイトル	掲載刊行物名	発行者
1	川口義二・与那 覇和雄・大城志 津子・当山清善	1976	琉球藍の醗酵建に関する 研究(第1報)発酵過程 に及ぼす諸因子について	琉球大学学術報告 No.23	琉球大学農学部
2	伊元幸春	1979	琉球藍の製造技術に関す る研究	沖縄県立伝統工芸指導所 昭和 52 年度業務報告	沖縄県伝統工芸指 導所
3	伊元幸春	1979	琉球藍製品の成分分析	沖縄県立伝統工芸指導所 昭和53年度業務報告	沖縄県伝統工芸指 導所
4	小橋川順市・伊 元幸春	1981	琉球藍の製造技法	沖縄県立伝統工芸指導所 昭和54年度業務報告	沖縄県伝統工芸指 導所
5	上江洲敏夫(沖 縄県教育庁文化 財課)	1988	琉球藍製造	沖縄県文化財調査報告書 第87集 沖縄県の諸職ー 県内諸職関係民俗文化財調 査-	沖縄県教育委員会
6	大湾ゆかり	1993	沖縄本島北部における琉 球藍の生産とその社会的 背景	沖縄民俗研究 第 13 号	沖縄民俗学会
7	大湾ゆかり	1994	リュウキュウアイ(琉球藍)の民族技術論的研究 一沖縄県本部町における 製藍技術を事例として-	筑波大学大学院環境科学科 修士論文	
8	仲地哲夫	1995	近世後期の琉球における 藍の生産と流通をめぐっ て	史料編集室紀要 第 20 号	沖縄県立図書館史 料編集室
9	大湾ゆかり	1998	藍壺雑考	沖縄県史研究紀要4	沖縄県教育委員会
10	小橋川順市・伊 野波盛勝	2004	琉球藍の藍壺所在調査報 告〜単槽式製藍施設 (藍 壺)の残存調査〜		琉球藍製造技術保 存会
11	常盤豊・世嘉良 宏斗・市場俊雄	2010	琉球地域の伝統産業「藍 染料製造」に関わる微生 物の特性	沖縄県工業技術センター研究報告書 第 13 号	沖縄県工業技術センター
12	盛谷理絵	2014	沖縄本島におけるリュウ キュウアイの泥藍つくり に関する研究	大阪芸術大学博士論文	
13	佐野敏行	2019	琉球藍、中国民間藍印花 布と久保マサー藍づくり にみる沖縄・台湾・中国 の関係文化史に向けて」	風俗史学 69 号	日本風俗史学会

チを活用し、デジタル化された史料をダウンロード た石井清吉著の『山藍新書』[石井1890]も含まれる。 して集めた。その中には当館が2019年度に購入し 詳しくは表3を参照いただきたい。

表 3. 琉球藍に関する明治時代から昭和初期の史料

	著者・編集者	発行年	記事タイトル	掲載刊行物名	発行者
1	五代友厚	1878 明治 11	製藍事業二関する建議書		NDL デジタルデータ
2	中川五郎吉	1888 明治 21	製藍新法 東京化學會誌 第9帙		NDL デジタルデータ
3	石井清吉	1890 明治 23	山藍新書		大木敬太郎
4	村松壽策	1890 明治 23	山藍實用新書 有馬藤兵衛校閱 1		NDL デジタルデータ
5	井上甚太郎	1897 明治 30	台湾・北海道・沖縄・九 州産業視察録[175]台湾 の部/沖縄の部		NDL デジタルデータ
6	児玉沖縄県技師	1915 大正 4	沖縄県染料植物	沖縄県農林水産行政史 第 15 巻	
7	松本秀雄・矢次 萬六	1916 大正 5	臺灣に於ける製藍業に就 て	工業化学雑誌 第 19 編 第 216 号	NDL デジタルデータ
8	西村助八	1923 大正 13			大城彦五郎 NDL デジタルデータ
9	鹿児島県	1943 昭和 18	第一編 県政の整備 第二編 県政の伸展	鹿児島縣史 第4巻	鹿児島県

## 2. 琉球藍等の名称について

ここでは、前項で示した資料をはじめ藍に関する 資料等から、「琉球藍」等の名称にについて整理して、 「琉球藍」を植物と染料で区別する場合にどのよう に呼ばれてきたか明らかにしたいと思う。

周知のとおり、琉球藍はアイ葉を水に漬けて藍成分を溶出させ、石灰を投入して攪拌し、その後沈殿したものの水分を抜く方法(沈殿法)で製藍する。こうして染料に製品化された状態では水分を含んで柔らかい固形状になるため、一般に「泥藍」と呼ばれている。しかし、この呼称について現在の製造者の中には、「泥藍」と呼ぶことを好まない人や、「琉球藍」と「泥藍」は別物であると主張する人がいる。そこで、本稿では、琉球藍がいつ頃から「泥藍」と呼ばれるようになったのか、その経緯と変遷につ

#### ①植物名

けることにする。

・キツネノマゴ科 *Strobilanthes flaccidifolius* Nees.: 片仮名で「リュウキュウアイ」と表記する。

いて調べてみることにした。その前提として筆者が 本稿で使用する名称については、次のように書き分 ・マメ科ナンバンコマツナギ *Indigofera tinctria* L. と タイワンコマツナギ *Indigofera Anil* L.:マメ 科の総称として片仮名で「インドアイ」と表記する。

#### ②染料名

- ・リュウキュウアイを原料にした染料:漢字で「琉球藍」と表記する。
- ・インドアイを原料にした染料:漢字で「印度藍」 と表記する。

琉球藍の名称の由来については、小橋川順市氏が 『沖縄 島々の藍と染色』の中で詳しく著述してい る。それによると、琉球藍は昔から単に「イェー」 としか呼んでいなかったが、廃藩置県後に鹿児島県 勧業課出仕の製藍局長となった有馬藤兵衛が、蓼藍 と区別するために、平地で栽培する蓼藍に対して山 手で栽培する琉球藍を「山藍」と命名したという[小 橋川2004:15]。

また、藍染料を「泥藍」と命名したのも有馬藤兵 衛で、これに対して関係者は、「丹精込めて製造し た藍染料に「泥」の字を冠すれば低品質のイメージ が付きまとうから避けてもらいたい」として反対し たという[小橋川2004:18]。このとき「泥藍」の代わりに「水藍」や「精藍」という対案も出されたが、結局は有馬の主張に押し切られ、「泥藍」は「山藍」同様に一般の通称となった。

この記録は、1890年(明治23)村松壽策著の『山 藍實用新書』に掲載されている。ここでは、本書第 三章中の有馬藤兵衛が言ったとされる部分を抜粋し て記載する。

「氏の説に曰く山藍にして琉球山藍と呼做するもの多しと雖も山藍ハ固と琉球初来の通稱に非す慶應元丑年山藍の再起するの際山邊に栽培して繁茂するもの多きを以て蓼藍と混沓せさるため茲に山藍の命稱を附したるは則ち予輩にして彼琉球に在てハ曾て山藍と呼ぶ者なし唯た藍と云ひ唐藍或は大藍と稱するのみ往古其種子琉球より移植せし起源を明尋する能ハされとも琉球の元産たることは疑ふ可あらさる事實なり我薩摩の古方言に總て之を唐藍と呼ふ(中略)」

「又泥藍を薩摩は古方言には藍蠟と呼ふ泥藍とハ 慶應元丑年予輩の附したる號稱なり其際同僚に異論 するものありて泥藍の文字を非難す予曰く金粉にし て畫工の用ゆるものを金泥と云ふ藍にして泥の文字 を用ふる何の不可か之れあらん且つ容子泥なるを以 て泥藍の名稱最も可ならすやと乃ち斯く泥藍と呼ふ 事になれり然れども此義を知らさるもの泥藍を以て 下等品と見る者多し故に之を避けんと欲し水藍と云 ひ精藍と云ふ (後略)」

これによると、慶應元年すなわち1865年(慶応元年)に、有馬藤兵衛が蓼藍との混同を避けるため、琉球藍を「山藍」と命名し、同年染料を「泥藍」と命名したことになり、それまでは、琉球の方言では「藍」と呼んでいたことや、薩摩の方言では植物を「唐藍」と呼び、染料を「藍蠟」と呼んでいたことがわかる。

『山藍實用新書』と同じ年に出版された『山藍新書』では、琉球藍は「琉球藍」や「山藍」のどちらかの名称でほとんど記述されている。本論1頁目には「琉球藍之説(下線は筆者、以下同じ)」と題し、本文中には、「阿波藍ハー名畑藍トモ唱へテ(中略)山藍二至テハ特二琉球地方二限リテ行ハレ未夕内地へハ傳播セス琉球地方二於テハ此藍ヲ呼ンテ唐藍又山藍或ハ単二藍ト云フ」とある。また途中では「阿州藍ハ琉球藍ヨリ藍褐二富テ藍青藍紅二乏シク琉球

藍ハ藍青藍紅二饒ニシテ藍褐乏シ」とある。しかし、 最後の頁の藍建て(本文中では「出方法」)の解説 で初めて「泥藍」という語句が出現している。

以上、『山藍新書』では「琉球藍」「山藍」「唐藍」「泥 藍」という語句が、いずれも琉球藍を表す名称とし て使われている。

次に、明治時代の新聞記事では、どのように表記されているだろうか。ここでは、『沖縄県史 資料編5 染織関係近代資料 技術1』に紹介されている明治28年から大正2年の記事から、植物としてのリュウキュウアイと染料の琉球藍の表記について整理してみた(表4)。

まず、明治28年5月7日付けの琉球新報の「開墾者と間切の交渉」という記事には、「山藍植付(下線筆者、以下同じ)」という文字が見られ、同日「藍葉の騰貴」では、「国頭各地方にては非開墾騒動の時無願開地を引揚けられたる為藍作地減少し殊に本年は藍の上作にあらさる故藍葉一斤に付壱銭弐厘位る騰貴せんとするの模様ありと云ふ」とある[沖縄県史1997:1]。明治31年4月1日の琉球新報では、染料のことを「製藍」と称し、同年4月期の他の新聞でも「製藍」という語句がみえる。

明治31年7月23日の琉球新報に、「泥藍の低落」という「泥藍」という語句を使った記事が登場したが、同年7月27日から8月11日の「黒川属国頭地方開墾談」の中では、作物としてのリュウキュウアイは「山藍」で、染料づくりは「藍作」、染料は「製藍」となっている。

さらに、明治33年1月23日の琉球新報「海外交易調査会(続)」の中で、将来新たに輸出が見込める貨物の中に「泥藍」が登場する[沖縄県史1997:28]。これ以降、泥藍という表記は頻繁にみられ、さらに「支那藍」や「印度藍」等との比較が始まる。

明治33年11月1日の琉球新報には、「<u>△藍玉</u>の騰 貴 本年は暴風の為め<u>葉藍</u>ハ非常に損害を受けたる 結果昨今ハ<u>藍玉</u>も非常に騰貴し居ると云ふ」[沖縄 県史1997:54]とあり、初めて「藍玉」が登場する。

明治33年11月9日の琉球新報に掲載された「国 頭視察録(三)」には、興味深い記述がある。

「(前略) 山藍に就ては目下一二の問題あり挿苗後陰をつくる所の掩ひ即ち雑木の枝に乏しき為め大に困難を感する故寧ろ木藍を奨励するに如かずと云ふ

論と山林か如何に濫伐せられたればこれ程の事に用を欠くまでに至らぬ矢張従前の通り山藍をつくる方得策と云ふ論もあり又製造法に就てもインチゴを製すへしと云ふ者あり矢張従前の<u>泥藍</u>にて十分なりと云ふ者あり(後略)」「沖縄県史1997:56〕

この記事の示す「山藍」とはリュウキュウアイを指し、木藍とはインドアイを指すものと思われる。また、製藍の方法については、「インチゴ」を製すか従来通りの「泥藍」を製すかという議論があったことが読み取れる。ここで出てきた「インチゴ」とは何であろうか。従来の染料が「泥藍」とすると、「インチゴ」はそれとは異なる製法の染料ということになる。

先述の『山藍實用新書』に紹介されている製法の うち、「生葉水製法」という方法がある。それによ ると、山藍の生葉を二段式の木製又は石造の槽を設 け、上の槽に生藍を入れて発酵させる。十分発酵し た藍液汁を下槽に移して攪拌棒で2時間攪拌し、さ らに石灰水を投じて1時間攪拌した後、6時間静置 して純藍を沈殿させる。上水を取り去り、沈殿物を 藍釜に移して極弱火で2時間煮詰め、水分を蒸散さ せる。これによって製藍が再び発酵して腐敗するの を防ぎ、冷やして圧搾機に移して水分を搾る。これ を樽又は箱詰めして販売するとし、琉球及び鹿児 島にて「泥藍」と称す、とある。また、印度では、 藍の生葉を水窟にし沈殿した純藍を釜に入れて煮 詰め、24時間放置して再び煮詰めて圧搾機に移し、 水分を搾り(華氏) 100度<sup>1)</sup> くらいの温室にて干し 固めて乾燥物をつくる、とある。すなわち、インド では石灰は使わずに攪拌のみでインディゴを沈殿さ せ、これを煮詰めて乾燥させているのである。これ が先述の「インチゴ」ということであろうか。

『山藍實用新書』には、インドの製法でできたものは「藍靛」と称し、「泥藍」とは区別している。

ここまでにおいて、明治30年代の前半は、リュウキュウアイはほぼ「山藍」と記され、染料の琉球藍は、「泥藍」「製藍」「藍玉」という名称が使われていたことがわかった。また、インドアイは「木藍」と呼ばれ、沖縄ではナンバンコマツナギとタイワンコマツナギの2種類を区別する記述はみられなかった。

ところで、新聞記事の中で琉球藍以外の染料について初めて言及されたのは、明治31年6月25日の

表4. 明治~大正初期の新聞紙上に出てくる藍の名称 (琉新:琉球新報、沖毎:沖縄毎日新聞)

	新聞	名称			
年月日	名	植物			
M 28/5/7	琉新	山藍、藍葉、藍葉、藍	NT1		
M31/4/1	琉新		製藍		
M31/6/25	琉新		印度藍		
M31/7/23	琉新		泥藍		
M31/7/27-8/11	琉新	山藍	製藍		
M33/1/23	琉新		泥藍		
M33/11/1	琉新	葉藍	藍玉		
M33/11/9	琉新	山藍、木藍	インチゴ、泥藍		
M34/2/27	琉新	山藍			
M34/3/1	琉新	山藍	泥藍		
M34/3/7	琉新		藍玉		
M34/3/27	琉新		藍玉		
M34/4/13	琉新	台湾の山藍 (台湾藍)	泥藍		
M34/5/7-7/1	琉新		泥藍、新藍		
M34/12/1	琉新		泥藍		
M35/1/23	琉新		泥藍		
M35/2/21	琉新		藍玉、泥藍		
M35/4/13	琉新	山藍、木藍、 蓼藍	泥藍、藍錠		
M35/5/23	琉新		本県藍、印度藍、「エヒト」紺		
M35/7/21	琉新		阿波藍、印度藍、 インジゴピュー ア		
M35/7/25	琉新		藍玉 (大島郡)		
M35/8/7	琉新	藍葉	台湾藍、琉球藍		
M35/12/7-12/9	琉新		泥藍		
M36/2/21-2/23	琉新		泥藍、インヂゴ ヒユアー		
M36/6/27	琉新		人造藍、印度藍、 瓜哇藍、インヂ ゴ、ピュア、日 本藍、マドラス 藍、カルカッタ 藍、天然藍		
M36/7/29	琉新	山藍			
M37/2/1	琉新	印度藍 (インド)			
M39/6/13	琉新		阿波藍、泥藍		
M40/1/8-3/22	琉新		泥藍		
M40/8/30	琉新		製藍		

M40/11/9-11/26	琉新	泥藍	
M45/6/13-7/23	琉新	藍玉	
T1/12/14	琉新	正藍、	硫化染料
T2/4/30	沖毎	製藍、	藍玉

「印度藍」に関する記事である。それによると、久留米絣で使用するものが多い印度藍は染色が違うので、協議の結果、これの使用を禁じ違約者は違約金を課すことが記されている[沖縄県史1997:7]。この頃から印度藍が流入してきたことがわかる。さらに、明治34年頃からは、台湾の山藍やインドの藍錠に関する記事が出現し、明治35年5月23日付琉球新報には、「エヒト」紺という人造藍の記事が初出する。

その後、人造藍と天然藍を比較する染色試験や人造藍の品質に関する記事が多くなる。明治35年代の新聞では、琉球藍は「泥藍」と記載していたが、人造藍や他の諸国の藍が入ってくるようになったためか、次第に琉球藍は、「本県藍」とか「琉球藍」と記されて区別されるようになる。明治40年代から大正2年までは、琉球藍は「泥藍」「藍玉」「正藍」「製藍」という語句が使われている。

インドアイについては、植物は「木藍」又は「印度藍」と称していたようであるが、明治37年2月1日の琉球新報には、「印度藍作情況」と題してインドのベンゴール及びビハールは印度藍の産地であるが、降雨不足により減作で、パンシヤブでは昨年より少し上作、マドラスにおいては藍作が増加しているという近況を載せ、藍の世界的情勢まで新聞紙上で伝えている。

また、明治35年4月13日付琉球新報には、山藍から製造する泥藍を用いた染織は甚だ美しく容易に褪色せず優等だが、栽培が面倒なので、台湾産の木藍を栽培して沖縄在来の製造法によって泥藍を製造し、これを乾燥して固形体の藍錠を作ってはどうかという提案がなされているほど、琉球藍以外の藍植物への関心も高まっている。

ちなみに、大正5年に書かれた『臺灣に於ける製藍業に就て』には、キツネノマゴ科のStrobilanthes flaccidifolius Nees.を「山藍」と呼び、マメ科の植物を「木藍」と称すとあるが、木藍にはIndigofera tinctria L.とIndigofera Anil L.があり、前者は台湾の在来種なので「本菁」といい、後者は外来種な

のでを「蕃菁」と呼んで区別するとある。しかし、マメ科の植物は波形が類似しているので、製藍作物調査の際には誤記を生じやすいとの記述もある。また、同資料では山藍は木藍に比して葉形が大きいので「大菁」と呼ぶとある。

### まとめ

以上、明治時代の史料と新聞記事から琉球藍等の名称について述べてきた。これを整理すると、初めは単に「藍」(おそらく読みは「イェー」又は「エー」)と呼んでいたところ、1865年(慶應元年)に鹿児島県勧業課出仕の製藍局長の有馬藤兵衛によって「山藍」や「泥藍」という語句が作られ、これらがその後次第に普及したものと考えられる。リュウキュウアイは、ほとんど山藍と称しており、藍葉は「藍葉」や「葉藍」「藍草」「藍」と記述されていた。染料としての琉球藍は、「泥藍」の記述がもっとも多く、続いて「製藍」「藍玉」「藍」「正藍」等と記されていた。

印度藍や人造藍が登場する明治30年代半ばになると、藍は「天然藍」や「製藍」と記されることが多くなったが、「泥藍」という言葉も依然として使われていた。さらに、印度藍の製法のように、石灰を入れずに攪拌のみで沈殿させ煮詰めて作った純藍を藍靛やインチゴ(インヂゴ)と称し、泥藍と区別していることもわかった。

しかしながら、この名称はあくまでも文字化された資料にあるものなので、実際に藍づくりをしていた人たちがどのように呼んでいたかはわからない。例えば、本部町伊豆味で製造しているA家では、製藍した染料のことを「イェー玉 (藍玉)」と言い、けっして「泥藍」とは言わない。また、藍葉も「ファーイェー (葉藍)」と呼んでいる。現在もA家が製造する藍は泥藍ではなく、琉球藍であり、両者は全く別物であるという。そうしたことから、伊豆味ではおそらく明治時代から今日まで、琉球藍は「イェー(藍)」又は「イェー玉 (藍玉)」と呼んできたのであろう。名称に込められた深い思いに無関心のまま調査していたことを深く反省するばかりである。

一方、インドアイという名称についても石垣では 自分たちでインドとは使わないという意見ももらっ た。小浜島では「エー(藍)」としか言わなかったとか、 八重山地方では、「シマアイ(島藍)」と呼んでいる という話を聞いた。現在、インドアイという言葉は 使わないようにしているとのことで、「ヤエヤマア イ」という新しい言葉も生まれている。

このような名称へのこだわりは、藍の製造者にとって良質な藍染料と作っているという強い気持ちの表れであり、自信をもって商品化するためのブランドのようなものだと思う。かつて、日本のタデアイと区別するために生まれた「山藍」という言葉は、その後「ヤマアイ」と和名を持つ他の植物<sup>2)</sup>との混同を避けるため、今ではほとんど使われなくなった。代わりに「リュウキュウアイ」という言葉が定着した。これと同じようにインドアイは「木藍」から「シマアイ」等の言葉に変化するか、あるいは学名の「ナンバンコマツナギ」や「タイワンコマツナギ」などを使用するようになった。筆者は、これらの植物と染料の名称については、展覧会の中でも十分注意して使用したつもりであるが、正直なところ、非常に使い分けるのは難しい。

せめて、言葉の出現時期を整理したことによって、 言葉が使われた時代背景や由来を知ることにより、 今後の研究の中に活かしていきたい。

## おわりに

琉球藍をはじめとする沈殿藍のことを、「泥藍」と呼んでこれまで何の疑問も持ってこなかったが、今回多くの藍関係者に聞き取り調査をする中で、藍の製造者の中には「泥藍」という名称は使わないという問題に直面した。そして、この名称を使わないことに深い意味があることを改めて発見することができた。

藍の製造者が、自分の作った染料は「泥藍」ではないと言い切ることの意味、そこには、泥から連想される下級品的なイメージを藍染料に付加しないという強い気持ちが感じられた。確かに明治時代以降の資料の中では、琉球藍は「泥藍」という名称で記録されてきている。しかし、人々の呼称の中では藍は「イェー」という言葉で表され、製品として出荷するときには「イェー玉(藍玉)」と呼んでいたのであろう。そのような深い意味づけのもとで染料を見ていくと、職人のこだわりがさらにみえてくる。

一方、明治期の文献史料をみると、製藍に関する

植物や染料の名称のみならず、さまざまな技法についても詳しく記されている。今回紹介できなかったが、山藍は、鹿児島から琉球、台湾にかけて大量に生産され、藍成分の含有率に関する化学的研究や製藍技法の開発等も盛んに行われていた。今回使用した戦前の藍関係資料の解読はまだまだ時間を必要とする。今後もこれらの内容を読み解き、藍の名称だけでなく、製藍技法や琉球絣等の染織物との関係、あるいは沖縄と台湾、日本本土との関係について調べ、今日に伝わる技術について勉強していきたいと思う。

#### 謝辞

本稿は、企画展「沖縄の藍」での調査研究の中で 集めた資料について、わずかに整理して執筆したも のである。資料整理は明治期までしか手が付けられ ず、中途半端な報告になったが、大正から現代にか けてはさらに作業を続けたいと思う。

今回、展覧会を通して多くの方々にご協力をいただき、藍の奥深さについて改めて学ぶことができた。この場を借りて、多大なご協力をいただいた井関和代氏、新道弘之氏、江上幹幸氏、平良次子氏をはじめ、作業の手を止めて貴重なお話をいただいた藍関係者の皆様に深く感謝申し上げる。

#### 引用文献

- ・小橋川順市2004『沖縄 島々の藍と染色』染織と生活社
- ・石井清吉1890『山藍新書』(NDLデジタルデータ)
- ・村松壽策1890『山藍實用新書』(NDLデジタル データ)
- · 脚沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室編 1997『沖縄県史 資料編5 染織関係近代新聞資 料 技術1』沖縄県教育委員会
- ・松本秀雄・矢次萬六1923「臺灣に於ける製藍業 に就て」『工業化学雑誌 第19編第216号』(NDL デジタルデータ)

#### 脚注

- 1) 華氏100度は摂氏38度
- 2) トウダイグサ科のヤマアイ (山藍) *Mercurialia Leiocarpa* Sied.et Zucc.